

「あわれみ深い人たちはさいわいで
ある 彼らにはあわれみを受けるであら

う」

(マタイによる福音書5章7節)

「電車の中でのことだった。一人の坊やが、金魚が三匹入ったビニール袋を持っている。酸素不足で二匹がぐったりしだしたのを目にとめた母親は、
「どうせ死ぬんだから捨てなさい」と子供から袋を取り上げ窓の外へポイ。

弱っていたが死んではおらず、一匹は元気に泳いでいた。小さな袋の中で必至で生きていた金魚は、こうして死んでしまった。

「どうせ死ぬんだから」という言葉は、どこかやり切れないものをもっている」

これは25才の青年が新聞に投稿した文章です。

この文章を読んで、私も青年と同じように「やりきれない」気持ちになりました。

あわれみの心がない。愛という思いやりの心が全くない。これが「やりきれない」気持ちの内容なのです。

「愛は神から出たものである……愛さない者は、神を知らない」（ヨハネ第一の手紙4・7、8）それは、神による心や思っているもっていないということです。宗教がないということです。

人の生活から神が無くなり、正しい宗教が消え去るということは、人として「やりきれない」ものになってしまふのです。

人間が人間らしさを保っていられるのは、決して人間自身の知能のおかげではなく、実は、神による「あわれみ」又は「愛」を心の中にもっているからにはかならないのです。人間のしるしである、神による「あわれみ」又は「愛」を自からすておいて、尚おかつ自から人間でありつづけようとすると、今日の人間存在の根本的な矛盾があります。

今日の人々の心のうちに正しい意味での宗教心の復興を切に祈ると共に、その使命を教

会は強く覚えねばならないと思います。

(52・5・1)

72

「『おいでなさい』とイエスが言われたので、ペテロは、舟からおり、水の上を歩いてイエスのところへ行った。しかし、風を見て恐ろしくなり、そしておぼれかけた」

(マタイによる福音書 14章

29節30節)

聖書の教える人間の救いは神の一方的な「他力」に於て成るのであります。人のはからいに於て人は己れを救うことは出来ず、只神の一方的なはからいに於てこそ

救われる。これが聖書の教え示す救いであります。

「おいでなさい」と言うイエスの招き、イエスのはからいにペテロは全く己れの身をゆだねて歩み出したとき、ペテロは海の上を歩くという、肉体をもつ人間の為し得ぬ歩みが出来た。不可能が可能になりました。

しかし、己れのはからいで立ち歩まねばと思ったとき、風や波が恐ろしくなり、海の中に沈みかける。イエスはこのペテロの有様を見て、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったか」とさとされる。正に「信仰」とは神の言即ちイエスの言葉に己れをゆだね投げ込むことです。つまり「絶対他力」に生きることであります。

「投げ込む」と言えば、道元の正法眼蔵の生死の巻に次のようにあるのを思い出します。

「仏となるに、いとやすき道あり、身をも心も、放ち忘れて仏の家に投げ入れて、仏のかたより行はれ、もてゆくとき、力をもいれず、心をも費さずして生死をはなれて仏となる」

先ず、神の愛なる絶対的なのはからいがある。このはからいこそキリストなのであります。

そして、そのはからいを、そのまま生き、はからいを具体的に私たちに示して下さいのがイエスその人であります。

イエスに於て私たちは、神の愛なる絶対的なはからいなるキリストを見ることが出来、そのキリストを信じて、己れをゆだねて生きることを信仰というのであります。

(52・5・8)

73

「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます。イエスはこう言って、ついに息を引きとられた」

(ルカ福音書23章46節)

これはイエスの最後の様子の説明であります。

私はここに、イエスの教えのすべて、信仰についてのすべてが語り示されてあるように思うのです。

「死を見ること帰すがごとし」という言葉がありますが、それは生れたもとへ帰ること、つまり生命の根源に帰るといふことです。

右のイエスの死の様は、正に「死を見ること帰するが如し」で、生命の根源へ帰られたといふことです。

生命の根源とは、私たちの日常の生活とは異ったものとして在ったり、又異ったところに在るのではなく、日々の生の依る所であり、そして死の帰するところでもあるのです。

自分の生の依り所、自分の死の帰するところ、これに眼覚めることを宗教に眼覚めると言い、又宗教に帰依すると言ふのです。又自分の生の依り所、自分の死の帰するところに見通しがつくことを信仰による救い、またさとりと云うのであります。

しかし、これは決して特別なことではありません。実は人間の生の目的は、この生の根源へ帰ることにあります。

父なる神とは、この生の根源そのもの、それは永遠であり、恵みと愛に満ち、光りであり義であります。そしてさらに創造者であります。

イエスのご生涯はこの生の根源の啓示であります。この生の根源がいかに愛に満ちたものであるか、即ち愛に満ちた生の根源は「めぐむ」ものなのです、つまり「芽をはぐくむ」もの産み出すもの、育てて下さるものであります。この「めぐみ」をイエスはご生涯を通して私たちに触れさせ、見させ、悟らせて下さったのです。つまり「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て手でさわったもの」とヨハネ第一の手紙一章一節にある通りです。

人生に於ける真の安心とは、この生の根源への開眼にこそあります。

「わたしはよい羊飼である。よい羊

飼は、羊のために命を捨てる。」

(ヨハネ福音書 10 章 11 節)

人間とはどのような存在であるか、という問いに対して、人間とは神に愛され、神に願いをかけられた存在である。というのが聖書の説くところであります。

それは、子どもという者が親に愛され、親に願いをかけられた存在であるのと同様であります。

そこで、この神の愛、神の願いを知り、その中に在る自分というものを信じ、感謝して生きることを信仰というのであります。

ところが世の中の宗教とか信仰とかいうものを見ると、人間の方から願いをかけ、その願いをかなえてくれるものが神仏として拜まれており、それを宗教とか、信仰とか言う場合が多いようです。

しかし、聖書が説く宗教・信仰は、神が人間を愛し、神が人間に願いをかけてくださるその愛と願いに包まれて生きることを言うのです。

「神のみまえに心を安んじていなさい。なぜなら、たとえわたしたちが、心に責められるようなことがあっても、神はわたしたちよりも心の大きいなるかたであって、すべてをご存知であります」(ヨハネ第一の手紙3・19-20)

わたしたちが神をみつめるのではなく、神がわたしたちをみつめていくのださる。神を一生懸命見つめて努力するのは道徳や倫理であり、みつめられている自分を深く感謝して生きるのが宗教であり、信仰というものです。

また、見つめられている自分の立場に立つときこそ、祈りというものが気らくに日常的となり得るのです。しかし、見つめる立場の祈りは、つねに願い求める祈りであり、しかも努力して、願い求め、あたかも相手からうばい取るような祈りとなってしまう。

人間が願い神がそれかなえるというのではない、神が人々を想い幸あれと願って下さり、その神の願い心にいだかれていることを感謝する、それが信仰であり、祈りでありま

す。

(52・5・22)

75

「あなたがたは『主のみこころであれば、わたしは生きながらえもし、あの事この事もしよう』と言うべきである」

(ヤコブの手紙 4章15節)

「おかげさまで」という言葉を私たちは用います。この言葉の意味するところは、私たちの人生には、私たちがよく見えて知ることが出来る部分と、私たちの知恵や能力では計り知ることが出来ない部分とがあります。その場合の計り知ることが出来ない部分の働き

のことを「かげ」の部分とし、それに「お」と「さま」という敬語をつけて「おかげさま」と言うのであります。

わたしたちが日々生きているのは、実は、生かさせていただいているのです。自分の意志で生まれ、生きて来たのでは決してありませんし、これからも生きて行けるものではありません。

私たちの人生とは、自分で意志し判断し、決定し行動できる部分と、自分ではどうすることもできない部分とが相交わって展開し進んでゆくものです。

ですから、一つのことごとが起ったり、成ったりする時、私たちはそれを自分がやったのだけれども「かげ」の部分の働きがあつて、やらせてもらったのであることを知って、「おかげさまで出来ました」と言うべきであります。

この「かげ」の部分を知らず、あたかも全てを自分がしたかのように思い込んでいることを、聖書は「誇り高ぶり」「高慢」と言っております。(ヤコブ4・16)

「おかげ」とは「主のみこころ」ということです。

「わたしは、生きながらえ、あのこと、このこともしょう」と人は言います。

しかし、それは全くの思いちがいはなほだしいというもので、必ずその言葉の前に「主のみこころがあれば」と附け加えるべきであります。

「主のみこころがあれば」つまり「おかげさまで」と言える人の人生には、現在と共に未来に於て「ゆだねた」平安・安心があり、本当の生きる勇氣と希望とが生じます。

(52・5・29)

76

「天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さる」

(マタイ福音書5章45節)

「わずかな庭の小草の白露を、もとめて宿る秋の夜の月」という歌があります。わずかな庭の小草の白露の上に、月の光がうつっている。月の光りほどのような小さなものうえにも、自分の全体をあらわしている。ああなんとありがたいことであろうか。ということを作者は歌っているのだと思います。

神がこの世のすべてを見つめるまなざしは、かくもいつくしみに富んでいるのであります。

しかし人は、あの人は良いの悪いのと言って批判し、差別して関わる、のみならず、己れを他人より高しとする。まさに、神がはかりなきお方であるならば、人ははかりあるものであります。

このように、人ははかりあることを知り、はかりある自分がはかりなき方のうちに、つまれはぐくまれている現在の自分の日々の生に眼ざめることを、さとりと言ひ救われるとも言うのです。

神のはかりなき愛の大きさは、私たちのはかりある知性や感性からしては思いもよらぬ

ことであるが故に、それは思議できぬもの、つまり不思議であり。さらに、わたしたち人間には、あり得ぬことのゆえに、神のはかりなきいつくしみは「ありがたき」ことなのであります。

このように、自分の心の小さ、狭ま^スの利己主義^{エゴイズム}的生の見にくき罪を深く知り、にもかかわらず、はかりなき神のいつくしみにつつまれて生かされている日々を感謝すること、よろこび生きることが信仰生活というのであります。

(52・6・5)

77

「口にはいってくるものは、みな腹の中にはいり、そして、外に出てゆくことを知らないのか。しかし、口から出てゆくものは、心の中から出てくる

のであって、それが人を汚すのである」

(マタイ福音書15章17節)

人間はつねに「聖いもの」と「けがれたもの」とをつくる。例えば、この日は悪いがあの日はよい、この方角はよいが、あの方角は悪い、あちらの部落の人はけがれており、こちらの部落の人はよい、又、この食べものは宗教的にけがれているが、この食べ物に宗教的に清い……などであります。

しかし、イエスは申されます。そのようなことは一切気にすることは無い。むしろ気にすべきことは、「聖い」とか「けがれている」とか言って「聖い」「けがれ」などをつくり出す心そのものが病んでいるということだ、と。

一体人生を暗く不幸にするものは何なのか、そのおおかたはひとがひとに対していなく、人のうちから生じる悪い心によるのです。「殺人・姦淫・不品行・盗み・偽証・誹りは心の中から出て来て、人を汚すのである」(マタイ15・19)とイエスは申されます。

「あれが悪い」「これが悪い」と人々は己れの内なる心を見ずして、己れの外なることのみ攻めたる。これを「無知」というのです。外なるものを攻めることによって己れを善のように思い込むが、その実、己れ自身の内なる悪を見ない、という意味で、それは偽善なのであります。

イエスは、その偽善に限りない悲しみを覚えられる。そして偽善にならざるを得ない人間のどうしようもない姿を自分自身の悲しみ痛みに感じ、それを助けようとして下さる。これがイエスが示す愛であり、救いなのです。そして、このイエスの愛を知り、見て、それ故に感謝しつつ自分のみにくき姿を少しでも、よくしようと思いやりの心を他人に対してもって生きることが修業の生といい、信仰生活というのです。人の幸いはこちらのみはじまることを知る者を「知者」といいます。

「信心を利得と心得る者どもの間には、はてしない、いがみ合いが起る。」

しかし、信心があつて足ることを知るの、大きな利得である」

(テモテ第一の手紙6章5節)

ここでの「信心」とは「神を拝むこと」を意味する言葉です。

ところで、神を拝むことを自分の利益の招来に結びつけるような「信心」は、人が日常もちつづける自分の欲望の満足追求の心、つまり「利己心」と同じ質の心である、という意味に於て、「信心」も人間のみにくい一面を示している一つだと申せます。

「信心」は「敬虔の仮面」をつけて現れて来る、しかし、その「仮面」の下は、みにくい利己心で満ちている。

信心すれば病気が治る。金がもうかる。事業が発展する・立身出世する。幸福になれる、

これらは皆「信心」を利得と思ひ、「敬虔の仮面」の下で自分のはてしなき欲望を満たさうとしている人間の悲しくも、みにくい利己心の現れ以外のなにものでもないのです。

このような「信心」は人をはてしない利欲追求の争いに引き込みこそすれ、人を本当に救つてはくれません。

しかし「信仰」はそうではありません。「信仰」とは、神が人をいとおしみ、はぐくんで下さる愛とまことそのものであり、さらに、その神のまことに人が応えて行くまことそのものであると同時に、その両者の合体に於て人に現成する平安・やすらぎ、これこそ「信仰」なのであります。つまり「信仰」は「信心」のような「敬虔の仮面」の下で利己心を追求するものではなく、神の愛とまことの故に自己を、その愛とまことの中へ投げ込む・ゆだねる・おまかせするという自己放棄なのであります。つまり「信心があつて足ることを知」らしめる深い平安が「信仰」なのであります。

「すべての事について、感謝しなさい」

(テサロニケ人への

第二の手紙5章18節)

どんなことでも、みなあたりまえだと思うのは、智慧のない人間の思いであります。

真の智慧をもつ者は、あらゆることに不思議を感じ、さらにありがたいと感謝の思いをいなく。

ものごとについて不思議を感じるのは、知識がないからというのではなく、むしろ知識があればあるほど、知識の限界を知って、大いなる不思議に頭が下がり、感謝の思いをもつようになるのです。

例えば、私したちにとって一番手近な「自分」ということについて考えてみるに、今ここに生きて在るということは、決してあたりまえのことではなく、ありがたいことなので

す。

「ありがたい」とは「あることがかたい」、つまり、めったにないこと、なん度もあることでなく、ただ一度きりのこと、ということです。

人間が死ぬということはあたりまえのことですが、それにひきかえ、今ここに生きて在るといふことは決してあたりまえのことではなく、**あ・り・が・た・き・こ・と**なのです。

しかし、私したちは今生きていることがあたりまえで、自分が死ぬことは、当分めったにないことだと考えています。ですから、生きて今あることに「あることがかたい」という「ありがたい」を感じないのです。

いろいろなことを見ることが出来る、いろいろな音を聞くことが出来る、味うことが出来る、触れること、心や身体で感じる事が出来る、さらに、いろいろな人と交わり、悲しんだり、喜こんだりすることが出来る。しかし、このようなことは必ずやがて出来なくなる時、即ち死が来る。これこそ当りまえのあたりまえで、これ以上に確実なことはいないのです。それにひきかえ、生れ生いきて今先に記した通りのいろいろなことが出来るという

ことは「あることがかたいこと」つまり「ありがたきこと」なのです。このようなことに
気づくと、今在ることは不思議であり、感謝すべきことなのだという智慧に至るのです。

(52・7・10)

80

「罪の増し加わったところには、恵
みもますます満ちあふれた」

(ローマ人への手紙5章20節)

「ありがたい」ということは「あることがかたい」ということである、と以前に申しま
したが、何ごとにも於ても、「あたりまえのこと」と思っているところには「ありがたい」
という気持はうまれては来ません。

例えば、他人から物をもらっても、もらうのがあたりまえ、と思ってもらうと、少しも

「ありがたい」思えないばかりか、もらった品物について文句を言ったりします。

しかし、もらうことが決してあたりまえでないのだ、ということに気づくなら、もらった品物がどんなものでも「ありがたい」と思うものです。そしてその時「ありがたい」思ったその人は、もらった品物を見て「ありがたい」と思うのでなく、ものをくれた人のところを見て「ありがたい」と思うようになるのです。

「わたしは、あの人から物をもらうようなことを、なにもしていない、そればかりか、時々あの人への悪口を言ったことだってある、だのに、こんなわたしにも、あの方は心にかけて物をくれた、何とありがたいことであろうか」

ありがたいという気持がここでは自分のおろかさ、自分の罪の自覚となっています。

「こんな私にも……」ということです。

右のようにみると、「ありがたい」という気持は、「こんな私しだのに……」という自分自身の罪の自覚があつて、はじめてもつことができるものだということがわかります。何ごとでも、あたりまえだ!!と思つて生きているうちは、本当のありがたきは、わから

ないのだと思います。

「あたりまえ」と思って生きる人生には、高・ま・ん・と・ぐ・ちが常につきまといま

しかし、「こんな私にも」と思って生きる人生には、何ごともしらべに転じて行ける
「ありがたい」人生を送ることができます。

(52・7・17)

81

「わたしのくびきを負うて、わたし
に学びなさい。そうすれば、あなたが
たの魂に休みが与えられるであろう」

(マタイ福音書11章29節)

くびきとは、車のながえの先につける横木で、それを牛馬の首にあてて車を引かせて荷

物などを運ぶそのことです。

人生とは重荷を負って坂道を行くがごとし、と古人は申しましたが、たしかに、己が背に重い荷物を負うだけでなく、心のうちにも多くの重苦しい荷をもって歩み行かねばならぬのが人生であります。

人生には後ずさりには許されません。苦しくても悲しくても、黙々と前に向かって進むよりほかありません。しかも自分の荷は自分だけで負わねばならない。このような人生は悲愴であります。すなわち人生の現実はきびしいと言われるゆえんであります。

イエスは、この人間の生活のさまを、多くの重荷をつんだ車のくびきを、首に痛くくい込ませて進み行く牛馬に見てとられたのです。

この人間の歩み行くさまを、深くあわれみ、悲しみ、いとおしみ給うのです。そして、自分を忘れて、「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい」と言いつつ、慈愛の手をさしのべて下さる。

「私がくびきをすべて負ってあげましょう」とは申されません。「わたしのくびきを負

って、わたしに学びなさい」と申されるのです。「わたしのくびき」とはイエスご自身が負って用いているイエスのくびき、ということですよ。

イエスが負うて用いていらしゃるイエスのくびきで、イエスと共に、重荷を引くこと、つまり私し一人ではなく、イエスと共に「私のくびきを用いて、引いてあげよう」と申される。イエスのくびきによる、イエスと二頭だてで私の人生の重荷を引いて歩み行くこと、これがイエスと共に歩む安心の生活であります。

「神様 罪人のわたしを おゆるし
ください」

(ルカ福音書 18章 13節)

素直に自分というものをみつめてみると、日々欲のころや腹立つころ、そういうころによって、わずらい悩まされている者であることを認めないわけにはまいりません。そして、それを認めたからといって、それらの愚かなころから離れられるかという、悪いと思っても離れられない、というのが本当の自分の日常の姿である、と言えます。このような人間の姿は、罪悪深重であり、全く罪に捕われた姿即ち罪人であると申せます。

もう一度申し上げますと、罪人ということは、欲のころ、腹立つころなどをもつている者のことよりも、欲のころ、腹立つころから離れることができないで、悩みつつも、それらに支配されてしまう「あさましき自分」そのものの姿のことを言っているのです。

「みなさん、自分のことばかり考えないで、他人のことも考えましょう」と教えられて「そうだった、他人のことも考えて自分のことは第二に考えよう」などと、反省することによりそのように自分の生活が変えられるのなら、人間は罪人などではない。

悲しいことだけど他人より自分のこと、悪いとは思うけれど自分のことを第一に考え、自分中心に利己的になってしまふ、そのようにしなくては、どうしても自分が生きてゆけない、そうするほかに自分の生きる道がない、という人間としての自分の現実の姿は「罪悪深重」であり、罪人なのです。

そして、そのような自分は、とうてい救われがたい者なのだということに思いあたるとき、人は誰れでも、「神さま、罪人のわたしを、おゆるしください」と合掌して祈らざるを得なくなるのです。

この人間の罪悪深重な姿に、思いやりをもって救いの手をさしのべて下さるのが、神の愛、イエスのいつくしみなのです。

「信心のために、自分を訓練しなさい」

い」 (第一ミモテ書4章17節)

これはむしろ、「神の恵みのもとにあることを知って、いつも感謝し、喜んで生活できるように自分をいつもととのえておきなさい」と意識すべき言葉です。

わたしたちは、自分を何かのためにととのえるということが、決してたやすい業でないことを知っています。

パウロは「わたしの肢体には別の律法があつて、わたしの心の法則に対して戦いをいどみ、そして、肢体に存在する罪の法則の中に、わたしをとりこにしている。わたしはなんとみじめな人間なのだろう」(ロマ7・23)と嘆いています。

つまり、人間は、ほつておくと、自分本位にものごとを考え、自分勝手なことを言ったり行動したりする罪にとらわれている者である、ということなのです。

それ故にこそ、自分をととのえる心がけが必要というものです。

神のお恵みに感謝して、喜んで安心して生活できるように自分をととのえるための最大の近道は、日曜礼拝をまもるといふことです。

日曜礼拝は日曜礼拝のためにあるのではなく、また神のためにあるのでもないし、ましてや牧師のためにあるものではありません。

それは、わたしたち一人一人の人間が最もよくととのえられるために必要なこととして、神がわたしたちと与え下さり、ゆるし給うことなのです。

日曜礼拝が自分をととのえる業なれば、それは自分を訓練する時であり、さらに日曜礼拝の場は道場でもあります。

そして、ととのえるための教えと、ととのえるための場と時とを備えて下さった神の愛に感謝し、その愛に自分をゆだねることが礼拝であります。

ひとは自分をととのえようと、自から訓練しなければ必ず、自分勝手なことを言ったり、行動したりする者となり、そのようなみにくい自分の姿にすら気づかなくなり、

「主であり、教師であるわたしが、あなたがたの足を洗ったからには、あなたがたもまた、互に足を洗い合うべきである」

(ヨハネ福音書13章14節)

普通世間では、足を洗うのは足を洗われる人より、その身分・地位に於いて下の方がするものだと思います。

だから、世の人々は出来得ることなら自分は、足を洗う者より足を洗ってもらおうほうになりたいたい、と願っています。

しかし、イエスは自から弟子たちの足を洗うことによって、世間一般の人々の考え方の誤りを指摘し、正しい人間関係の在り方を教え示されたのです。

イエスが指摘される誤りとは何なのでしよう。それは「当りまえだ」と思う心です。つ

まり、自分は身分や地位がお前より高いので、地位の低いお前がおれの足を洗うは「当り
まえだ」と考える考え方の誤り、また、自分はある人より地位や身分が下だから、足を洗
うのは、くやしけれども仕方がない、と思う心の誤りです。

そして、イエスが示した正しい人間関係とは、その身分や地位の上下にかかわらず、相
互に足を洗い合うかわり、つまり相手への思いやりの心、それは相手があつてこそ自分
が在るのであり、相手は自分のために在るのではなく、相手のために自分があらしめてい
るのだという人間の自然な定めに於ける人間関係の在り方についての開眼があります。

イエスは、身分や地位を上下の関係で考えないで、役割の分担という事で見ておられ
その役割は相手とのかかわりに於て機能し、従つて、相手への思いやりなくしては自分は
成り立たず、相手をも成り立たないという人間存在の眞実に眼を向けて語ってられるの
であります。

従つて、イエスは人間関係に於ける最も根本的で、かつ重要な人間存在の在りようを、
自から弟子たちの足を洗うことにより語り示されたのです。

85

「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない」

(ヨハネ福音書15章13節)

他人のために自分の命をすてて、他人をたてようとするのが最も大きい愛であるということはよくわかります。しかし、わたしたちの現実の生きざまは、およそこの最も大きな愛からは、かけはなれているが故に、つい観念的に浮き上ってしまうのを感じるので、ですから、この最も大きい愛を語れば語るほど、語る者も、聞く者も、しらじらしさを感じるのでないでしょうか。

では、この言葉が「本当にその通りです」と素直に受け入れ解るためには、どうすれば

よいのでしようか。

そのために一つの例えを述べ考えてみたいと思います。

机を思い浮べて下さい。それには台があり、その台を支えるための足があります。つまり机とは台と足から成るものです。ただけでは未だ机ではなく足だけでも未だ机ではありません。また、台と足とがばらばらにあるだけでも未だ机ではありません。机が机と成るためには台のために足がとりつけられ、足のために台がとりつけられねばなりません。このことを別な言い方をしますと、台に対して足は自己主張し、足自身足のことのみ考えていては、決して机になることは出来ませんし、机の足も足としての自分に成ることが出来ず、ただの棒であるにしかすぎません。これは台についても同じことです。即ち台が机の台に成るためには、台が足に対して自己主張し、台自身台のことにのみ考えていては、机になることは出来ませんし、それではただの板にしかすぎません。

大切なことは足や台が机の足、机の台に成るために、足は台のために死なねばならず、同様に台は足のために死なねばなりません。と同様に人が人としての自分となるためには、

人であるあなたのために死ぬことが必要なのです。

わたしはあなたとの関わりに於てわたしになるというのも同様です。

人が友のために死ぬという愛に於て、わたしという人、あなたという人が成るのです。

愛の関わりに於てこそ、人は人となるのです。従って表記の聖書の言葉は人が人となるまことの道理を語っているのです。

(52・8・21)

86

「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に」

(マタイ福音書22章21節)

人間は生きてゆくうえで、いろいろな問題にぶつかりますが、それらは大きく分けると

二つになります。

一つには、人生に於ける問題であり、二つには、人生そのものの問題であります。

人生に於ける問題とは、食うこと、着ること、住むこと、人と人とのつきあいのこと、さらに病気のこと、また平和のこと……等、いわば人間が生きてゆくうえで経験する悩みであります。これらの問題に対して私たちは、私たちの知識をもって正しく対処し、解決へと努力しなければなりません。

では、人生そのものの問題とは何かと申しますと、人間は好むと否とにかかわらず、やがて老いて死なねばならぬ限りある存在であるということ、また、生きるためには他の生ある動植物などを殺生しなくてはならぬという悲しさ、さらに愛はわかっている、自己中心的利己的になってしまふ自分自身のおろかさ……等です。これらは人間であることの悩みであり、私たちの知識ではどうにも解決のつけようのない問題であります。そして、この問題にかかわり、人をして安心立命に導かんものこそ宗教であり信仰なのであります。神の愛はこのどうにもならぬ悩みに恵みとして、さしのべられるのです。

ところが、世の中には知識でもって解決へと努力しなくてはならぬ人生に於ける問題を宗教信仰でもって解決しようとする感かをする人々があり、それを売りものにする宗教でない宗教があります。祈れば病気が治る、祈れば金がもうかる、祈れば試験に合格する……。こんなところに宗教の出る幕はありません。

イエスが「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に」と申されるのは知識と信仰の混同に対する教訓としてであります。

それにしても、人生そのものの問題を問題として自覚し、宗教信仰に心を向ける人々の何と少なきことでしょうか。

(52・8・28)

87

「エルサレムから離れないで、かね

てからわたしから聞いていた父の約束
を待っているがよい」

(使徒行伝1章4節)

右手と左手を打ち合せると音が出る。その音は右手から出たものでもないし、左手から出たものでもない。音は右手と左手とが打ち合せたそのところから出たのであります。

今かりに、信仰ということを音に例えるならば、さしずめ右手は神のはたらきであり、左手は人のはたらきだと言えます。即ち、信仰が生ずるには、神のはたらきと人のはたらきが打ち合わされねばなりません。

信仰とは信ずることだとよく言われています。たしかにその通りです。しかし、信ずるというこちら側、即ちわたしたちの側だけの信でもって、信仰が生ずると思うのは、左手のみで音を出そうとするようなもので、決して信仰は生じては来ません。それは独断であり、独善であり、ひとりよがりの狂信ということになります。

信仰が生ずるには、先述のごとく神のはたらきが一方に於てなければなりません。そし

て正しい信仰は必ず、この神の側のはたらきが先ずあり、それに応える形で人の側の信ずるをはたらかせるのです。

イエスによる神の約束がある、この約束の故にわたしたちは信ずるのです。

「約束をして下さったのは忠実なかたであるから、わたしたちの告白する望みを、働くことなく、しっかりと持ちつづけ……」（ヘブル10・23）るのです。

イエスが、その生涯をかけて示した一事は、この約束にうながされ、約束に応える私たちの信ずる信仰であり、信仰の喜び、平安・力・希望・勇気であります。

「アブラハムは受けつぐべき地に出て行けとの召しをこうむった時、行く先を知らないで、その言葉に従い出て行った」（ヘブル11・8）

わたしたちの信ずるは、このアブラハムの信であります。

パウロは、「われ氣狂えるなら神のためなり」と言いましたが、神の約束に氣狂わんばかりに、身も心もなげ入れてこそ、信仰という偉大な出来ごとの平安と勇氣と喜びとを得るのであると聖書は私たちに教えているのです。

（52・9・4）

「よくよくあなたがたに言っておく
 あなたがたが父に求めるものはなんでも、わたしの名によって下さるであらう」

(ヨハネ福音書16章23節)

聖書を「信仰の書」として読むと言うことは、聖書を神の約束の書とし読むことにほかなりません。

イエスを通して語られた言葉、また多くの弟子たちが自からの体験により証言する神のまこと。これらの言葉を記した聖書の言葉を、神のまことの言葉としてすがりつき信じて生きる、このことが結局、信仰に生きるということです。

しかし、この場合は、つきりさせておかねばならぬことは、言葉をただちにまことと信じるのではなく、イエス・キリストの故にまこととなる言葉を信ずる、ということでありま

イエスさまが真実であると信ずるが故に、イエスの言葉に己れの身も魂も置き、イエスの中へ自己を投げ入れて生きる。このことをへブル書は「信仰とは、望んでいる事がらを確信し、まだ見ていない事実を確認することである」と語っています。

さて、ここに一つの驚ろくべき言葉があります。即ち表記の言葉です。

イエスの名によって祈るなら、何でも神は下さる。というのです。イエスの名の中へ自分の祈りを全くゆだねること、これがイエスの名によって祈るということです。

イエスはゲッセマネに於ける祈りに於て「わたしの思いではなく、みこころの成るようにして下さい」（ルカ22・42）と祈られました。みこころの中へ己れの祈りを、己れと共に投げ入れてしまうこと、これがイエスの名によって祈ることです。

親鸞は「たとひ法然聖人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ」と申して念仏に自己をかけたのです。それが親鸞の信仰のすべてでありました。

「今まで、あなたがたはわたしの名によって求めたことはなかった。求めなさい、そう

すれば、与えられるであろう。そして、あなたがたの喜びが満ちあふれるであろう」

(ヨハネ 16・24)

「イエスの名によって祈ります」とは、祈りに於ける最後のつけたしではなく、そこに祈りのすべてがかかっている言葉です。

(52・9・11)

89

「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者はいつまでも死なない」

(ヨハネ福音書 11章 25節・26節)

イエスは、わたしは命であると申されます。では、わたしは命であるという、その命と

はどういう命なのでしょう。これを一口で言うことは、とてもむづかしいので、木についての例えで申しますと、ここに一本の桜の木がある。花を咲かせ葉をしげらせ、その木は正しく生きていて、即ち命をもっている。

しかし、冬が来ると花も葉も枝々から無くなり、木は死んだようになる、これを見て誰も桜の木は死んだとは言いません。でも、春になって花もつけず、葉もつけなければ、その桜の木は死んだと思われまます。確かに木は枯れて死んでしまったのです。その木の命はなくなったのです。わたしたちは命というものをこのように考えるのです。ですから、命があるということ、その一本の桜の木が、いつまでも枯れることなく、花をつけ、葉をしげらしていることだと思ひ込んでいます。

しかし、イエスがわたしは命であると申される命とは、枯れて無くなったり、花や葉をつけることによって生れる命ではありません。その桜の木が枯れても、他に桜の木が育っている、さら、それらの桜の木全部が無くなっても、他に木々が育っている、そして、たとえ、すべての木々が枯れても草々が生え育っている……こうして、この地球上のすべて

の動物・植物が無くなっても、それらに関係なく命としてある命、このような命についてイエスは語り、その命の表われそのものがわたしたち、と申されるのです。

ですから、たとえ死んでも生きると申され、生きていて信ずるものは、いつまでも死なない、と言われるのです。

神を信ずるとは、この命に自分をゆだねること、そこではも早やこの世と来世とは一つとなり、この世にいて来世におり、来世にいてこの世にいる。つまり死は無くなり、ただ生だけがあるようになるのです。これが「死は生にのまれてしまった」ということです。

(52・9・18)

90

「わたしはよい羊飼である。よい羊飼は、羊のために命を捨てる」

(ヨハネ福音書10章11節)

イエスの時代ユダの南部・ヨルダン川東の草原などで盛んに牧畜が行われ、牧畜の中心は羊でした。

羊は臆病で自衛力がなく、しかも地理の弁えがないので迷いやすい動物だと言われています。そこで人の場合理由は羊と異っても、迷いやすいという意味で、又神から離れて迷う人々の形容として羊が語られました。

羊にとってよい羊飼にめぐり会えることは、このうえなき幸いであります。泉と若草のあるところへ導いてくれるばかりでなく、数々の外敵から羊のために自分の命をかけ身体をはって守ってくれるからです。

「よい羊飼は、羊のために命を捨てる」しかし、「羊が自分のものでない雇人やとじんは、おおかみが来るのを見ると、羊をすて逃げ去る」(10・12)

イエスは申されます。「私はよい羊飼です」と。それはほかでもなく、わたしたちをご自分の愛するう・ち・な・るものとして関わって下さっているからです。迷い出た愚かな羊のために、よい羊飼は他の羊を置いて野山をかけめぐり、探し出すまでその一匹の羊を求めつ

づけるのです。これが神の愛であるということを、イエスに於てわたしたちは知らされ、かつ見せていただくのです。

「イエスは、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。それによって、わたしたちは愛ということを知った」(ヨハネ第一の手紙 3・16) わたしたちは、こんなにも大きな神の愛のうちに生かされているのだ、というわたしの現在について知らされると同時に、真の愛とはそれであり、そこから始まる、ということも理解させていただくのです。信仰とは、この神の愛を実践するところにあるのではなく、この神の愛に自分という愚かな羊が、育はぐまれているということを信ずるところに生きることです。

(52・9・25)

91

「おそれの心をもって、相互に仕え

合うべきである」

(エベソ人への手紙 5章 21節)

わたしたちは誰れもが、自分のしあわせを求めています。

ところで、自分のしあわせというものは、自分ひとりで得られるものではありません。しあわせは、自分と他人とのかかわりの中から生れて来るものです。

ひとから愛されて、自分はしあわせを感じます。ひとから親切にされて、自分はしあわせを感じます。ひとからほめられて、自分はしあわせを感じます。ひとから感謝されて、自分はしあわせを感じます。ひとから物をうけ、自分はしあわせを感じます。

しかしまた、自分は、ひとを愛してしあわせを感じます。ひとに親切をほどこして、自分のしあわせを覚えます。ひとに感謝し、送りものをして自分のしあわせを覚えます。

しあわせとは、愛を与えたり受けたり、親切を与えたり受けたりする自分と他人さまとのしあわせの交わりに於て、生れて来るものであります。ですからしあわせを「仕合せ」

と書くのであります。

「互に仕え合いなさい」とは、建前論としての、ただの道徳訓として聖書は語っているではありません。「互に仕え合う」とは、人間がしあわせで在るための根本的な在り方なのです。つまり、この仕え合う在り方以外に、人間のしあわせの在り方は絶対に無いのです。

「仕え合う」とは「愛し合う」ということです。「仕え合い、愛し合う」ところで人は自分の生きている仕合せしあわせを感じ、人間を感じるのです。否・人・間・に・成・る・の・で・す。

この人間にとって根本的なしあわせの在り方を、具体的な自からの行為により教えて下さったのがイエスさまです。

「神がこのように、わたしたちの愛して下さったのであるから、わたしたちも互に愛し合うべきである。……もし、わたしたちが互に愛し合うなら、神はわたしたちのうちにいます」(ヨハネ第一の手紙 4・11)

「キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべきこととは思われず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた」

(ピリピ人への手紙2章6節―8節)

神の愛とは、悩み多き人生を生きる私たちを、どうあっても救い、辛い日々を送らせてやろうという願いごころをもって、親しく語り、やさしく手をさしのべて下さるところにあります。

神はその愛を、イエスに於て具体的に現して下さいました。ですから、イエスは、「わたしを見た者は、神を見たのです」と申されたのです。

ところで、「方便」という言葉がありますが、この「方便」という言葉の意味について

曇鸞という中国の高僧は、「正直を『方』といい、おのれをほかにすることを『便』という」と申しています。つまり、「正直で誠実でまじめであるのが『方』、自分を捨てて相手になりきるのが『便』です」。

いふなれば、イエスは神ご自身の私たちに對する愛の「万便」なのです。

どこまでも自分というものを捨て、おのれをむなしうして、悩み悲しむ私たちの生きる現場まで来て、私たちと同じようになって、共に苦勞し助け救うて下さるイエス。このイエスの生きざまは、ほかでもなく神ご自身の私たちに對する愛の現れであり、従ってイエスは神ご自身の愛の方便なのです。

イエスは神を父と呼び、自からを子と呼ぶとき、それは父自身の思いの具体化として生きた、という意味でイエスは眞の神の子なのです。「父とわたしとは一つである」とイエスが言われるゆえんです。

イエスは父なる神の思いを、わたしたちに現わして下さったのです。父の思いとはほかでもなく愛です。慈悲です。「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さ

った。それは子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ福音書 3・16)。私たちは、このような神の愛につつまれて生きていくのだ、という事実を、イエスに於て具体的にを見せていただいているのです。

93

「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。そのかたは、ここにおられない」

(ルカ福音書 24章 5節)

これはイエスの墓を訪ねたマリヤたちが、墓の中で聞いた神の言葉です。

その日マリヤたちは、葬ったイエスに花を献げ、香油をふりかけるために出かけて行きました。彼女たちは生前のイエスの想かげを胸にえがき、生前にイエスの側において共に語りあったその時の言葉、御姿を想い考え、それらの想い出の中に、しばしの間自分をおく

べく墓に行ったのかもしれませんが。

彼女たちはたしかにイエスを愛し、イエスを信じていたでしょう。しかし、そのイエスは生前のイエスであり、十字架の上で息をひきとり死んでしまったイエスだったので。そこには生きて働き給うイエスはおられず、おられるのは、死かばねとなって墓に横たわり、今や全くもの言わず、何一つ答え給わぬイエスであります。彼女たちは、その死せるイエスの中に生前のイエスの言葉を、想かげをおもいみて、その幻想のイエスにすがりつこうとしているのです。

このような彼女たちのイエスとの関わりに対して神の言葉は、はっきりと告げ知らせたのです。

「そのような死せるイエスはここにおられない。イエスはよみがえられたのだ」と。

イエスはよみがえり給うた。イエスは死に打ち勝ち生きてい給う。死せるイエスの想いに生きるのではなく、今生きてい給うイエスと交わり今日を生き明日を生きよ。これが彼女たちが墓の中で聞いた神の言葉だったので。

「わたしは世の終りまでいつも、あなたがたと共にいる」。これはイエスの約束だと聖書は語っています。「いつまでも、あなたがたと共にいる」。これがよみがえり給うたイエスの現在なのです。このイエスと共にあることを信ずることが聖書の信仰なのです。しかるに、わたしたちは、マリヤたちと同様に「生きていられる方を死人の中にもとめる」愚かをし、死人の生前の中に自己をしたす幻想との関わりに生きることを、あたかも信仰であるかのような誤りをおかしてはなりません。聖書の神は「死んだ者の神でなく、生きている者の神」（マタイ 22・32）であり「神の国（神の恵の支配）は言葉（幻想）でなく、力（現実）なのであります」（コリント第一 4・20）信仰とはイエスの過去に生きることでなく、イエスの現在に生きることであります。それは、神の過去に於ける恵に生きることでなく、神の現在の恵に生きることであります。故に信ずる者は今強く、今を平安に生きることが出来るのです。正に「今は恵の時、救いの時」なのです。

「わたしたちの住んでいる地上の幕屋がこわれると、神からいたただく建物すなわち天にある、人の手によらない永遠の家が備えてあることを、わたしたちは知っている」

(コリント人への第二の

手紙5章1節)

「生者必滅・会者定離」これは人生の理であり、誰れもこれより逃れることは出来ません。

表記の聖書の言葉を語るパウロは、やがてこわれて滅びゆく自分の人生を嘆いているではありません。彼は自分の人生の向うがわにある世界を見通して喜び、それ故に、こわれて滅んでしまう今の人生に、かぎりない平安をいだき、かえって、滅んでしまう人生にもかかわらず、それを生きることには意義を見出しているのです。

「生者必滅」だけの人生を見て、それ以上に自分の人生の見通しに盲目なる者の人生は

それ自体淋しく空しいものであります。

パウロは、自分の人生の向うに、「永遠の家が備えてあることを」知っており、それは一切が神の自分に対する配慮によるものだ、と申しています。

しかし、パウロは、それ故にこの人生は、つまらぬものだと言って否定などしません。

安易な現世否定者は、安易な現世肯定者と共に軽薄な現世主義者であります。

「わたしは、見えるものによらないで、信仰によって歩いているのである。それで、わたしは心強い」とパウロは申します。彼は、今生きている人生の現場を、しっかりと見さえ、しっかりと自分の足でふみしめています。あたかも「さあ!! やったるで!!」とでも言っているかのようです。このパウロの人生への確固たる態度は、神により与えられる自分の人生の向う側を見通している信仰によるのです。

キリストにある信仰は、その人間の過去・現在・未来・死後の一切に恵みの光りを当てそれらのすべてを喜びと感謝に変えてしまうのです。

「父（神）がわたし（イエス）を愛されたように、わたし（イエス）もあなたがたを愛したのである。わたし

（イエス）の愛のうちにいなさい」

（ヨハネ福音書15章9節）

人はすべて神の愛のうちに生かされているのであります。この事實は、人がそれを認めるか認めないかということに一切関係なく、人が今ここに生きて存るということにかかわる事實なのであります。それはあたかも、人が空気について、どのように考えようが考えまいが、空気が人の生存を生存たらしめているようにかかわっていることが事實であるのと同じです。したがって、人が神の愛のうちに生かされているという事實は、一切の論議に先行する根本的な事實なのです。

しかし、神のうちに生かされているという表現は、それが事実を語っているにもかかわらず、わたしたちにとって最も不確定で抽象的且つ観念的表現でしかない故に、わたした

ちはそれを、事実としてすぐには認めがたいのです。

わたしたちは自分の目で見、自分の手でさわり、自分の耳に聞こえなければ、それを事実として信じ受けられません。そこで神は、神のこの愛の事実をイエスという一人の人間に於て語り、示して下さったのであります。これが「神の言葉が肉体となり、わたしたちのうちに宿った」(ヨハネ1・14)ということの意味なのです。そして、それはほかでもなく、神がわたしたちの目で見え、手で触れ、耳で聞き得るところまで下って来て下さったという、神のわたしたちに対する愛以外の何ものでもありません。

イエスが、その生涯を通して語り示されたことは、「神がわたしを愛されたように、あなたがたも神の愛のうちに生かされている」ということであります。

イエスは、その生涯のかぎりをつくして、わたしたちに対する神の愛がいかに大きく、いかに深いかを具体的に語り示すことにより、わたしたちが安心して生き、平安のうちに死んで行けるようにして下さいました。

わたしたちは、神の愛のうちに生かされて在ることを知ることによって、自分がどのよ

「種は良い地に落ちた。そしてはえ、
育って、ますます実を結び、三十倍・
六十倍・百倍にもなった」

(マルコ福音書4章8節)

うに人生を送るべきかを自と悟るようになり、生きていくということが、生かされて
いるという喜びと生甲斐に変わり、人生に於けるさまざまな出来ごとに出会っても、安
心のうちに対応し対処出来るばかりでなく、イエスが十字架の死を越えて向う側に生かさ
れた如く、わたしたちも自分の死の向う側に自分の生を見る者とされるのであります。神
の愛を知る者のすばらしさはここにあると言えます。

(52・10・16)

良い地というのは、はじめからあるものではありません。良い地であるためには、たえず鍬や鎌でもって、人が汗をながして手入れをしていなくてはなりません。鍬でたがやすことを忘れたり怠ったりすると、土はかたまったり、土地はやせてしまつて、切角の良い種も無駄になつてしまいます。また、鎌で雑草をかり取ることを怠ると、草は言うに及ばず、雑木までしげり、遂には原野にもどり、も早やいかなる良い種もうけつけず、何一つ収獲することが出来なくなつてしまいます。

良い地ははじめからあるのでなく、日々の努力で良い地と成らすのであります。

では、良い地とはどういう地であるかと言いますと、種が本来もっている、一粒をして三十粒・六十粒・百粒に果のらせる良き生命力を十分に出現させる地のことであります。

「聖なるものを犬にやるな。また真珠を豚に投げてやるな。恐らく彼らは、それらを足で踏みつけ、向きなおつてあなたがたにかみついてくるであろう」（マタイ7・6）といエスは言われます。

わたしたちは犬や豚のように、切角の良きものを見過しにしてしまふばかりか、駄目に

してしまふ愚かで盲目者になつてはなりません。

良きものを良きものとして感謝して受け、三十倍・六十倍・百倍へと成長する、その良きものの良さを出現させる良き土地になれるように、わたしたちは日々の努力が必要です。

神の前や人の前で、言い訳や自己弁護ばかりしている者は、結局、自分から神の恵みにあずかる道を閉ざしてあります。使徒パウロは、罪人なる人間はただ、神の一方的なお恵みによってのみ救われることを強く感じ、それを福音として人々に教えました。その彼でさえ、「自分のからだを打ちたたいて服従させるのである」と言つて、すすんで努力することを言っています。日々の修業こそ最も大切なことであります。

(52・10・23)

97

「信仰に立ちなさい。男らしく、強

くあってほしい」

(コリント第一の手紙16章13節)

信仰に立つとは、信仰に基づいて自分の生活をおしすすめて行くことです。そのように生活した代表的人物として聖書は、アブラハムについて記しています。即ち「信仰によって、アブラハムは、受けつぐべき地に出て行けとの召しをこうむった時、それに従い、行く先を知らないで出て行った」(ヘブル11・8)アブラハムは、その一族と共にハランという町に住んでいました。「時に主はアブラハムに言われた、あなたは国を出て、親族と別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい……。アブラハムは主が言われたようにいで立った」(創世記12・1〜4)のです。即ちアブラハムは、信仰によって行く先を知らないで出て行ったのです。

もし、アブラハムが、ただ行く先を知らないで出て行ったのなら、それは向こう見ずな知慧なき行動だと言えます。しかし、アブラハムは、「出て行け」と申されるお方を信じ

ているが故に、そのお方が必ずや最も善きようにして下さることを知り、その最善を向うに見て、出て行ったのです。このような生きざまが信仰に立つことでもあります。

現実を己れの知識や打算で見えて分析し計算して行動する。これが私たちの毎日の生活のしかたです。しかし、信仰に立って歩むとは、己れの知識や打算による我を捨てて、現実がいかがやうであれ神の愛と正義を信じ知って、その現実の中に立つことであります。

わたしたちは、ともすると、現実には則して聖書を読み、イエスの言葉を聞こうとする。しかしそのようなところでは、常識的・倫理的な世界があるだけで、本当の宗教や信仰による平安と喜びの世界はありません。

イエスを信ずる信仰は向う見ずの無謀なる行為でなく、神の愛と真を信じ知るところの信と知でもって向うを見る行為であります。それ故に、「信仰とは望んでいる事がらを確信し、まだ見ていない事実を確認することである」(ヘブル11・1)と申せます。

「栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった」

(マタイ福音書 6章 29節)

考えてみると人間がすることの一切は、自然のつくり出す造形や巧妙さや法則以上ではあり得ないし、それら自然の猿真似でしかすぎないことを知ります。いくら美しいものを画き作り出したとて、それはしよせん自然の美しさの一部分であり、どのような巧妙なものも製作したとて、それは自然の法則の応用にしかすぎません。また、大発明、大発見だと人々が騒ぎたてたとて、それらは、自然が本来秘めもっていたものを探り出したまでであります。その意味で人間は決して、いかなる意味に於ても創造することは出来ぬのであります。ただ、ただ自然のわく内で生きる存在でしかあり得ないと申せます。

このように人間に限られた内で生きている者であることを知ること、これが人間の知慧

というものです。

にもかかわらず人は、あたかも自分がすべての創造者であり、すべてが自分たちのものであるかのように思い込み、自分の美しき、自然の知識、自分の力を誇ります。しかし、この人の姿をみて「天に座する者は笑い」給います。

「あなたがたは、あすのことわからぬ身なのだ。あなたがたのいのちは、どんなものであるか、あなたがたは、しばしの間あらわれて、たちまち消え行く霧にすぎない」（ヤコブ 4・14）私たちは誇るべき何ものをもってはいない。栄華をきわめた時ソロモン王でさえ、自然に存在する花の一つほどにも着飾ることは出来なかったのです。

「もろもろの天は、神の栄光をあらわし、大空は神のみ手のわざをしめす。この日は言葉をかの日につたえ、この夜は知識をかの夜につげる。話すことなく、語ることなく、その声も聞えないのに、その響きは全地にあまねく」（詩 19・1／4）何と神は悠々たる壮大であることか、また何と広々たる優美さであることか。人はその中に生かされているのです。

自然とは何か、それは神の栄光であり、神の手のわざであり、神の心の誓きであります。それ故にパウロは申しました。「だれも人間を誇ってはいけない」、「誇るものは主を誇れ」と。

今わたしたちは、己が眼を天に向け、その思いを神に注ぎ、神の恵みの偉大さを仰ぎみて、その恵みの中に生かされていることを喜び、生かし給う恵みの神を誇るうではありませんか。そして「あすのことは、あす自身（神のみ手）に」ゆだねようではありませんか。

(52・10・31)

99

「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」

(ルカ福音書23章46節)

これは、イエスが十字架の上で語られた最後の言葉です。わたしたちは、このイエスの言葉によって、イエスが自分の生涯の日々を、どのような心掛けで生活しておられたか、ということを知ります。

イエスは、自分が帰るべきところを知っておられ、自分が依りたのむべきかたがどなたであるか、ということを見ておいでになったのです。

「……しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようになしてください」（ルカ22・42）。これがイエスの祈りの基本でした。神はわたしについて、わたしがわたし自身を愛する以上に、わたしを愛してください。という神に対する信頼。生れて来たこと、生きていくこと、死んでゆくこと、それらのすべてが神の御手の中に抱えられているのだ、という信仰。つまり自分の帰依するところやお方が何処であり、どなたであるかということを明確に信仰に於て知っておられ、見ていらっしゃる。「私と父（神）とは一つである」。「私を見たものは父を見たのである」という神との一体感。恵みと愛に満ちる神に生き、神に死す故に生死を超越した平安。それ故に「わたしの思い」などイエスに

はなく、ただ「神のみこころ」のみがあり、その「みこころ」が「自分の身に成る」ことのみ願ひ祈られたのです。

イエスは、わたしたちのことを「救うものなき迷える羊である」と申されます。それは帰るべきところを知らず、依りたのむべきものを失って、さまよえる羊のような人生をすごしているからでしょう。罪人とは、帰依すべき何をもちて、ただ己れ自身のみをたのみとし、最後にすべてが無らしく朽ちはててしまう人間の現実の姿を言ったものです。神の愛は、この罪人をどうあっても救うという願ひにあります。イエスはこの神の愛、神の願ひそのものとして生き給うたのです。十字架上に於て極まるイエスの生きざまは、わたしたちを愛し給う神の愛の大きさ、わたしが救われんことを願うその願ひの深さを語り示しています。

わたしたちは、このイエスを見て神の愛を知ると共に、その愛に抱かれて生きる信仰に開眼せしめられるのです。これがほかでもなく、イエスの十字架によるわたしの罪の贖いとして語られるところの内容にほかなりません。

イエスの十字架の死がわたしの罪からの救出であり、それによって、わたしは完全に神の御手に抱かれたと信ずるとき、イエスはわたしのキリスト、即ち教主となるのです。もはやわたしが生きているのも、わたしが死んでも、またわたしが何如なる出来ごとの中にあっても、喜びの中にあっても、すでに神の愛の御手の中での出来ごとであると観じられ、その時キリスト・イエスと共に「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」という絶対平安を得ることが出来るのであります。

100

「愚かな者よ、あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう。そして、あなたが用意した物は、だれのものになるのか。自分のために宝を積んで、神に対して富まない者は、これ

と同じである」

(カル福音書 12章 20・21節)

イエスは、人間の生活ということを、この世かぎりのこととしてではなく、肉体の死を契機として死後につづく永遠の生命による生活ということを含んだところの人間の生活ということを考えておられるのです。

しかし、わたしたちは、この世かぎりの生活だけを考えて日々を過しています。人間の愚かとは、この世だけしか考えない、この世だけしか見えない、見ないというところにあると言えます。

「我らが、すべての年の尽くるは一息の如し、我らが年を経る日は七十才ななそじにすぎず、あるいは健すこやかかにして八十才やそじにいたらん。されどその誇るところは、勤勞と悲しみとのみ、その去りゆくこと速はやかにして、我らもまた飛びされり」(詩90)。これは人間の儂はかなさを嘆いているのではなく、この世の生活の無常迅速をしっかりとわきまえて、自分の日々の生活

を智慧深くすごしなさい、ということを行っています。故に、先の詩篇の記者はつづけて「われらに、おのが日を教えることを教えて、智慧の心を得させてください」と祈っています。「おのが日を教える」とは、自分のこの世の生の無常迅速なる現実をよくわきまえる、ということですよ。また、それ故に中世の修道院に於ける日々の挨拶の一つが「メント・モリ」即ち「汝死すべきものなり」ということだったことを知らされるとき、これも「おのが日々を教える」ための智慧の一つだとおもいます。また、仏教に於ける日蓮も、「人の寿命は無常なり。出づる息は入る息を待つことなし。風の前の露、尚なほ誓ちかにあらず。かしこきも、はかなきも、老いたるも、若きも、定めなき習ひなり。されば先臨終のことを習うて後に他事を習うべし」（妙法尼御前御返事）と語っていますが、これらのことは今日わたしたちが肝に命じて想いみるべきことであります。

この世だけの生活を見、この世だけの生活にしがみついている者は、「自分のためにのみ宝を積」みます。しかし、この世の無常迅速な己が生活の終りと共に、その宝も一切は空と化します。

しかし、イエスは「神に対して富め」と教えてくださいます。それは、わたしたちがこの世に於ける生活の死を契機として、その後につづく永遠の生活を神と共なる栄光あるものとするために、この世の生活の日々で、その備えをしておけということ、否、すでにイエスに於て神が備えてくださった救いの恵をし・か・り・と見すえて現在を生活し、将来を生活し、死をも生活し、死後も永遠に生活することを確信するということにほかなりません。信仰人が眼のつけどころ、気のつけどころはこの一点にのみあるのです。